

令和 5 年 8 月 9 日

松阪市議会議員 山本 芳敬 様

松阪市議会議員 蒼水会  
代表 沖 和哉

## 蒼水会 先進地視察実施報告書



令和5年7月31日(月)～8月2日(水)の3日間において、  
先進地事例視察を実施いたしましたので、下記のとおり報告いたします。

日 時 令和 5 年 7 月 31 日(月) 14:30 ～ 17:00

視察先 北海道函館市(はこだてみらい館・はこだてキッズプラザ)

テーマ 函館市の中心市街地活性化計画について/はこだてみらい館、はこだてキッズプラザについて

参 加 沖 和哉、深田 龍、野呂 一平、森 遥香

日 時 令和 5 年 8 月 1 日(火) 14:00 ～ 17:00

視察先 北海道白老町 ナチュの森(白老町立虎杖中学校 跡地)

テーマ 白老町の廃校リノベーションについて/ナチュの森について

参 加 沖 和哉、深田 龍、赤塚 かおり、野呂 一平、森 遥香

日 時 令和 5 年 8 月 2 日(水) 9:00 ～ 11:30

視察先 北海道札幌市 子ども発達支援総合センター「ちくたく」

テーマ 札幌市の子ども施策について/子ども発達支援センターについて

参 加 沖 和哉、深田 龍、赤塚 かおり、野呂 一平、森 遥香

# 令和 5 年 7 月 31 日(月) 函館市

## 1. 函館市について

- ・イカの漁獲量は年々、減少している一方で鯖や鰯の漁獲量は増えてきている。  
温暖化によるものだと言われている。
- ・昭和52年には32万人いた人口も、近年は毎年3,000人の減少(道内で一番多い人口減少数)

だからこそ、人口減少を食い止めるために雇用の創出や中心地の賑わいを取り戻す施策が必要だった。  
今年に市長選で大泉新市長が誕生し、市長肝いりの「人口減少対策本部」が立ち上がったところ。



## 2. はこだてみらい館、はこだてキッズプラザについて

### 【政策的経緯】

前市長の公約であった。「函館市中心市街地活性化基本計画」を策定し、駅前という中心地に人の賑わい・活気を取り戻すための政策として始まった。(だから商業振興課が今も所管している)

なお、建物の5～16階は84戸のマンションとなっていて、市は3階(みらい館)と4階(キッズプラザ)だけを使用している。管理運営は指定管理方式でみらい館は(株)NAアーバンデベロップメント、キッズプラザは(株)こどもクラブへ委託。

### 【質疑応答】

Q.みらい館の利用者割合は？

A.市内3割、道内3割、道外3割

Q.市内、こども園や教育との連携については？

A.教育現場では令和2年度のプログラミング学習の必修化により、ドローンやロボット学習の受け入れが増えた。

Q,現状の課題は？

A.みらい館:平日の集客対策、学校教育として修学旅行の受け入れの注力、コンテンツのマンネリ化の回避といったところ。コンテンツ入れ替えに 2,000 万円を投資している。

キッズプラザ:大型遊具の更新が課題。大規模なりニューアルを検討中。

一部利用料金制の導入を検討。市内の小中学生に活用していただくために、無償化を検討している。

みらい館は商業施設内にあるため、学校の指導要領で、保護者の同伴が必要になる。行き帰りの問題。

長期休みは 3 人以上でないと行ってはいけない、などルールが障壁となっている。

Q.無償化にされたいようだが、今後の方向性としては、どうお考えか？

A.まだまだ市内利用は 3 割。もっと市内利用を増やしていきたい。そのために市民の無償化を検討している。

Q.未来へ向けての投資となると有料が課題なのか？

A.市民も観光客も、集客施設の位置づけで整備したが、市長が変わって子育て支援に力を入れているため、そういう施設にもなるかもしれない。そういう施設でないと、施設のあり方が問われるかもしれない。

Q.シエスタ函館、キラリス函館とのすみわけは？

A. G スクエアは、若者(高校生～社会人)向けの施設。みらい館は小学生～中学生くらいをターゲットに最先端の技術を体験できる場に、キッズプラザは駅前の子育て支援をする場としている。G スクエアはターゲットを高校生から社会人とし、若者が自ら何をしてもいい場となっている。セミナーなどもしている。

Q.どうして駅前にその機能があったほうが良いと思われたのか？

A.北海道新幹線が開業して、北斗市から函館ライナーという電車が通るようになるところだった。人が来られることが予想されるのに、さびれているような状況ではダメだということで、再開発案が出てきた。駅前の百貨店が空き店舗になり、再開発を行った。

Q.開発計画に、地域の人たちを巻き込んだのか？

A.中心市街地の活用エリアで、それぞれの地域の人と意見を交わし論議してきた結果のものだ。

Q.社会教育施設であれば 20 億円を投資して、市民が利益を享受できるものができるが、経済部で所管していることを考えると 1.8 億円の赤字を毎年出しているともみることできる。福祉的な部分と経済的な部分でご苦労されているのかと思うがいかがか？

A. 公共事業としては一定の効果はあると思う。施設の性格などが市民にとって必要なのだということを説明できることが重要だと考える。

Q. 整備のプロポーザルで Sony の関連会社関わっているが、函館市外の会社にお金が行っている考え方もできる。函館市で税金を回す考え方はなかったのか？

A. キッズプラザはこどもクラブが運営。みらい館の運営は NA アーバンデベロップがしている。先進的な技術の学びを提供できる会社が函館にない。

Q. 教育的な連携はされていないのか？

A. 学校から出前講座をしてくださいという依頼が来ている。プログラミング学習はPCの前で実際にPCを操る。ドローンやロボットのプログラミング教育ができる場として、立ち位置を確立したいと取り組んでいる。

その他

- ・みらい館は年間利用者66,000人を目標としている。
- ・修学旅行の受け入れ:300校、道内100、東北地域160校、その他40校



### 3. 所感

函館駅前の賑わいを取り戻し、活性化を果たすべく整備された「はこだてみらい館とキッズプラザ」。松阪市も駅西再開発計画が持ち上がっている中で、函館市も掲げられた目的は同じ「駅周辺の賑わいを取り戻す」ことだった。この共通項から視察をさせていただいた。

函館市としては、市民だけでなく、日本人・外国人観光客が訪れる場所として駅周辺の中心地に賑わいをつくるために整備を行ったが、実際は施設の性質が生涯学習的な「みらい館」と、こども・子育て支援的な「キッズプラザ」ということで、そもそもの目的と手法に食い違いがあるように感じられた。現在の施設機能のままであるなら、駅前にあるよりかは、もう少し駐車場へのアクセスが便利で、駅前の渋滞などのストレス

からも解放されるような場所にある方が望ましいかもしれない。

ただ、両施設ともに質は高く、潜在的な需要もまだまだ掘り起こせるようには感じる。だからこそ、なおさら観光需要を喚起するための施設ではなく、市内の子育て世代への公共サービス事業として舵を切った方が、よりシンプルな事業設計や運営ができるのではないかと思うところである。

また、歩行者の通行量で駅前の賑わいが戻ったかどうかを検証されていたが、駅周辺の古いビルを建て替えたことにより、一定の景観整備の効果はあったと思われる。ただ、函館市も車社会であるとのことから、検証方法は違う手法もあっていいと考える。

駅周辺というのは、不特定多数の人が多く行きかう場所であるということから、新しいものを作れば人は訪れるかもしれないが、一過性であってはいけない。対象を設定するなかで、駅周辺という立地を生かした上で、どんなサービスを提供すべきなのか、基本的なことをしっかり考える必要があると改めて気づくことができた。

文責:深田 龍

## 令和 5 年 8 月 1 日(火) 白老町

### 廃校リノベーションについて/ナチュの森の運営と在り方について

#### 4. 白老町について

面積 425.64 km<sup>2</sup> 総人口 15,556 人 世帯数 9,269 世帯

白老とは、アイヌ語で「虻(あぶ)の多いところ」と言う意味の言葉「シラウオイ」からきたと言われている。

東西に細長く伸び、その面積の約75%を森林が占め、海、川、山、森と様々な自然にあふれたのどかな街である。白老の気候は穏やかで、夏は涼しく冬の積雪もあまり多くなく、春と秋には豊富な自然が織りなす豊かな風景を楽しめ、四季折々の様々な表情を楽しむことができる。

(白老町特設ページより抜粋)

#### 《概要》

新千歳空港から道央自動車道を利用して約40分、札幌市から約1時間の距離に位置しており、国道36号や北海道旅客鉄道(JR 北海道)室蘭本線が横断しているほか、後志方面に接続する北海道道86号白老大滝線(四季彩街道)、地方港湾の白老港が整備されている。

アイヌの人々が町の歴史の基礎を築き上げており、アイヌ文化の振興は町づくりの施策の1つになっている。2009年(平成21年)の「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」によって提言された「民族共生の象徴となる空間」(ウポポイ)を整備しており、ポロト湖畔に国立アイヌ民族博物館や国立民族共生公園、高台に慰霊施設がある。大部分が国有林で支笏洞爺国立公園になっている。白老川や倶多楽湖は環境省の調査による水質日本一になったことがある。

## 5. ナチュの森について

### ①施設整備の背景や民間企業との協働に至る経緯など

#### 【これまでの歩み】

2011年08月 石山工業団地用地を取得

2012年07月～虎杖中学校へ移行後跡地利活用に係る地域説明会・議会全員協議会開催

2013年03月 虎杖中学校閉校

2014年05月 白老町と(株)ナチュラルサイエンスによる旧虎杖中学校土地建物売買契約締結

2017年07月 ナチュラルファクトリー北海道竣工

2018年08月 ナチュの森オープン（ナチュラルガーデン完成）

2022年01月 白老町・登別市と地域創生に関する包括連携協定を締結

2022年12月 自然と科学のミュージアム 森の工舎オープン（ナチュの森全体完成）

### ②改修工費や運営コスト、町への歳入効果などの経緯について

《工事概要》「企業誘致は【まちの活性化】の特効薬である」

学校は丸々買い上げて(約7千500万円)企業が工事

【改修設営費】工場 約23億円/校舎 約8億5000万円/ガーデン 約6億円



【町への歳入効果は…】

●固定資産税に限らず、経済活動、ふるさと納税など、その効果は計り知れない。

➔ 2022年「企業版ふるさと納税」制度を活用し、北海道白老町と登別市に対し、合計4,000万円(白老町2,100万円、登別市1,900万円)の寄付をおこなう。

●その他、子ども達へのギフトなど、金額面だけではない子ども達への企業活動の影響が大きい。

- ➡ 2018年 白老町にベビーギフトセット100セット寄贈(以後毎年寄贈)
- ➡ 2019年 胆振東部災害見舞金寄付(北海道へ300万円)
- ➡ 2020年 白老町へアルコールジェル9,500個寄贈
- ➡ 2023年 赤ちゃん和妈妈を対象とした「ママ&キッズ」のスキンケアセット「赤ちゃん和妈妈の出産スキンケアセット」1000箱(300万円相当)を白老町近隣の苫小牧市に寄贈。寄贈したスキンケアセットは、同年4月以降に新生児が産まれた家庭を対象に保健師が訪問する「赤ちゃん訪問」の際に、苫小牧市の担当者より手渡しする予定。

### ③ ナチュの森の地域創生への取り組み

自然を守りながらの生産活動を大前提として、一緒に地域を守り育てていくための活動を行っている。

- 2022年 白老町・登別市と地域創生の包括連携協定を締結
  - 「地域福祉や健康増進」「子育て支援や子どもの育成」「地域の発展とまちづくり」「暮らしの安心・安全」「地域の景観・自然環境の保全」の5項目について協力して取り組むことを協定した。
- 白老町の「指定避難場所」にナチュの森を登録
- 脱孤育て支援、冬の遊び場の提供
  - 「雪の積もる冬でも子どもたちが思いきり体を動かせる場を」と、体育館だった場所を屋内型の「あそびのひろば」として子育て中のご家族が集える場所とした。
- 学びの場の提供
  - 中学校の職業体験受け入れ、保育園の遠足の受け入れ、スキンケアイベントの開催。工場見学ツアーや「森の工舎」での体験を通して、モノをつくる喜びや自然・科学の楽しさを提供。
- スキンケア製品の寄贈、白老町地域イベントへの協賛と出展
  - 地域の一員として、スキンケア製品の寄贈や地元活性化につながるイベントや祭礼などの協賛や設営サポートなどを行っている。
- 授産施設や地元の雇用創出
  - 自然を生かした研究農園やガーデン施設の管理は、共同作業所の皆様と一緒にしている。他施設でも、地元の方々や、旧虎杖中学校出身のスタッフが多く在籍している。ナチュラルサイエンスおよび姉妹会社ナチュラルアイランドは、障がいのある方への支援活動が評価され、2017年に「全国手をつなぐ育成会連合会」に表彰された。

### ④ 統廃合や廃校活用における町民の方々の反応

《今では…》

- 「ナチュの森」が地域の自慢になっている(町民の誇り【宝】になっている)。
- 近隣のまちばかりでなく札幌市あたりからも「ナチュの森」に来訪がある(企業視察も多い)。
- 登別市では町民に利用料の50%補助を出してでも利用してもらおう(案)という動きがある。

## ⑤廃校利活用における町外への宣伝効果

- ナチュラルサイエンスを中心に「じゃらん」などに掲載(観光施設となっている)
- 白老町を上げて広報施策に取り組んでいる
  - ➔ NHK で特集を組もう！道内の各局も特集を組む
- エスコンフィールドのコンサルタント・施工の会社が同じ
  - ➔ エスコンフィールドの紹介に載せる(F ビレッジガーデン)
- 年間約 30,000 人の利用(視察見学、職業体験など)
  - ➔ 対応スタッフが足りない
  - ➔ 大学生などの対応は就職にも関わるので大切にしている



## ⑥オープン後、約半年経過して、課題や今後の展望

- 一番は「エネルギーの高騰(35%以上アップ)」。
  - ➔ 以前は施設の景観確保のために周りの敷地を買収。
  - ➔ エネルギーの高騰から今度は自分たちの太陽光パネルをつくろう。
- 第二工場の計画(埼玉 or 北海道)もあるものの雇用が問題
- 地域のコミュニティ交通の確保(最寄りの駅またはバス停から施設が遠い)
  - ➔ 2019 年頃は中国人観光客がたくさんいてタクシー等もいっぱいあったが現在は激減。
  - ➔ 行政のサポートを得て、なんとかコミュニティ交通を確保していきたい(登別市とも協力)。

《大きな生活圏が二つに分かれている白老町》

西側は苫小牧 東側は室蘭・登別 東西 28 キロのまち

- ➔ 行政主導だと町の中心街へ向かう側の交通整備しかできない。
- ➔ 議会や商店街が反対する(あと100mの交通整備ができない)。

だから6企業によるコミュニティ交通が活躍

- ➔ 「観光」をメインとして企業コミュニティ交通の運航サポート(白老町と登別市)を検討中

- 自治体の住民サービスを自分の自治体だけで考えるのではなく、住民主体で物事を考え、的確なサポートをしていきたい





## 6. 所感

前回に続いての「廃校リノベーション」についての所感である。少子化の進行と人口減少、現在の廃校状況と国策などについては、南房総市視察で述べた通りである。

今回の廃校リノベーションは「企業誘致」である。しかし、あくまで「人が肝心であった」という思いは否めない。企業社長の想いに加え、白老町の企業誘致担当の職員さんの熱意が、この素晴らしい廃校リノベーション(今回の場合は=(イコール)企業誘致)を生んだのである。

しかし、この度の視察を受けても感じることは、まだまだ縦割り感が否めないことであった。学校の再開発である廃校リノベーションの最大の課題は「都市計画法」だと話していた。また、オープンしてからの課題も、市町村をまたぐ公共広域交通の整備だという。「現実」を突き付けられた気がした。

今回の視察を少しずつ掘り下げていってみたい。廃校リノベーション成功のキーワードは「水」である。白老町には、日本有数の透明度を誇る倶多楽湖の湧水があり、化粧品づくりの原料としてはもちろん、ガーデンの運営やサロン、レストランにまで様々な方向に活用している。その水の湧き口のすぐ近くにあったのが、もうすぐ廃校となることが決まっていた旧虎杖中学校であり、10年にわたり、株式会社ナチュラルサイエンスと姉妹会社の株式会社ナチュラルアイランドが、北海道白老町や地元の方の協力のもと完成させた施設が「ナチュの森」である。

化粧品の開発工場は、上記の通り、社費を投じて校庭内に建築され、旧虎杖中学校の校舎はリノベーションされ、「森の工舎」として、「香りのラボ」、「蒸留実験室」、「ライブラリー」「えほんのへや」、「ギャラリー」のほか、「蒸留カフェ」や「森の工舎ショップ」など、自然と科学を通じた、さまざまな発見や学びを楽しむことができるミュージアムとなっている。体育館は、すべり台の”アスレチックふわふわ”や、トランポリンマットの”エアトラック”など、雪の積もる冬でも、子ども達が思いきり体を動かせる全天候型の屋内施設となり、旧グラウンドエリアを活用したナチュラルガーデン、雑林と雑草の工舎を開墾した有機農園を造るなど、親子で楽しめる文化拠点施設「自然と科学のミュージアム 森の工舎」となっている。

その上、白老町・登別市と地域創生を目的とした包括連携協定を締結し、「指定避難場所」への登録、学びの場の提供、スキンケア製品の寄贈や白老町地域イベントへの出展協賛、地元の方の雇用創出など、様々な公民連携での地域貢献を提供している。

また、環境保護への取り組みにも熱心で、環境マネジメントシステム ISO14001 を取得して自然環境を守りながら化粧品づくりを行おうと共に、排水処理に対しても、洗浄水の使用量を抑え、工場排水は河川には流さず、生活排水は施設内に設置したバイオマス浄化槽でろ過処理し、厳しい自社基準で合格となったもののみを河川に排水している。虫よけには生き物にやさしいアロマを使用し、工場の機械は稼働する時間を決め、夜は決まった時間になったら真っ暗に消灯し、人工的な光が及ぼす影響を最小限にとどめている。

上記のような、これからへ向けての課題はあるが、現在の状況だけで考えると、まさにパーフェクトな企業誘致と廃校リノベーションと言えるのではないだろうか。「水」が結び付けた“奇跡”と言ってしまえばそれまでも、企業側の地域に対する感謝と行政努力が、これだけの地域貢献を生み、ナチュの森が「地域の宝」だと言わしめていることには疑う余地もない。白老町内には、あと一校(旧社台小学校)、活用方法を検討している廃校があるそうだが、その動きにも注視していきたい。

前回の南房総市での廃校利活用視察報告で述べた「廃校の活用は、活用後が重要であり、ただ活用すれば良いということではない。活用後に、補助金や税金に頼らず、自律的な収益を上げることが重要である」という点、マンパワーに頼り切らず、必要な行政支援もあり、公民連携による広域的な活動も行われている。「みんなの廃校」プロジェクトでいう、自治体にとってもやり方次第で雇用拡大、定住促進、地域おこしに直結する「好素材」となっている上、企業にとっても地域密着型の経営を考える事業者には最適な施設であり、高い宣伝効果、高い社会的貢献ができています。課題やトラブルに関しても、廃校が元々地域資源であることから、設備及び管理条例の制定が困難であり、活用する際は地域住民のニーズを汲んだ活用が求められること、また、転用する場合の条件(制限)があり、専門的な知識が必要になる点など、すべてに直面し、それをクリアしてきている事からもパーフェクトである。



しかし、最終的には広域連携と人材確保という課題に向き合うこととなっていた。生活圏域と行政区割りの違いにより、生活圏域からのコミュニティ交通の確保ができておらず、企業6社の自助努力により運営されている点と、事業拡大による人材不足である。

企業側としても、ナチュの森が地域の宝となり、そこで働きたいという人材の移住定住に取り組む動きがあり、近隣市町村も、利用料を補助してでも利用を促す動きもでてきている。また、ナチュの森の観光施設としての有用性からも、観光的観点からではあるが交通機関の確保への動きもあるそうである。

「公共性を担保し、地域に密着して、共に歩むことのできる廃校活用のメリットも、移住定住促進の一翼の担う起爆剤と成り得るのではないのだろうか」、まさにそんな活動が今ここにある、そんな視察であった。

文責:野呂 一平

令和 5 年 8 月 2 日(水) 札幌市

## 7. 札幌市子ども発達総合支援センター「ちくたく」

札幌市子ども発達総合支援センター「ちくたく」は、子どもの身体や心の発達、情緒面や行動面の問題に対して、医療・福祉の総合的な支援を目指すために、複数の施設が集まった複合施設です。それぞれの部門が協働しながら、必要な支援を考えていく施設である。

**“ちくたく”の構成施設**

**子ども心身医療センター** 診療所

子ども発達総合支援センター内にある医療部門です。心身の発達に遅れ・障がいが見られる子どもや、心に悩みを抱える子どもを医学的に診断し、心理治療や、精神科デイケア、リハビリテーション(理学療法、作業療法、言語聴覚療法)、保育、家族支援、各種相談等を行っています。

**対象** 原則18歳未満の子ども  
※児童精神科の初診は、15歳(中学生)まで

**診療科目** 児童精神科、小児科、整形外科、耳鼻咽喉科、眼科があり、診療は予約制になっています。



**発達医療センター** 診療所

児童福祉総合センター内にある医療機関です。発達の遅れや身体の障がいが見られる子どもを医学的に診断し、治療やリハビリテーション(理学療法、作業療法、言語聴覚療法)、家族支援等を行っています。

**所在地** 札幌市中央区北7条西26丁目1-1  
(地下鉄東西線 西28丁目駅から徒歩約6分)

**電話** 011-622-8640

**対象** 原則18歳未満の子ども

**診療科目** 小児科、整形外科 診療は予約制になっています。



**児童心理治療センター“こころぼ”** (児童心理治療施設)

心の悩み等により地域や家庭での生活が困難な子どもを、児童相談所の措置により一定期間お預かりし、入所による生活・心理支援を行います。  
また、通所による心理支援も行っています。

**対象** 原則18歳未満の心理的ケアが必要と児童相談所が判断した子ども

**定員** 入所:23名 通所:5名



**自閉症児支援センター“さぽこ”** (福祉型障害児入所施設)

個別的な支援計画に基づく日常生活スキルに関する支援を提供し、子どもたちの状態改善をはかります。  
また、ご家庭のご都合等で必要な時には短期入所による支援も行います。

**対象** 原則18歳未満の主に自閉症の子ども

**定員** 入所:27名 短期入所:5名



**かしわ学園** (福祉型児童発達支援センター)

単独または親子で通園し、基本的な生活習慣や集団生活への適応など遊びを通じて早期療育を行っています。  
また、計画相談支援、保育所等訪問支援などの地域支援を行っています。

**対象** 就学前の主に知的・発達障がいのある子ども

**定員** 通所40名



**ひまわり整肢園** (医療型児童発達支援センター)

親子で通園し、保育やリハビリテーション(理学・作業・言語聴覚療法)など総合的な早期療育を行っています。  
また、計画相談支援、保育所等訪問支援等の地域支援も行っています。

**対象** 就学前の主に肢体不自由のある子ども

**定員** 通所30名



**はるにれ学園** (福祉型児童発達支援センター)

児童福祉総合センター内にあり、かしわ学園同様に、就学前児の早期療育と各種相談支援等を行っています。

**所在地** 札幌市中央区北7条西26丁目1-1  
(地下鉄東西線 西28丁目駅から徒歩約6分)

**電話** 011-622-8650

**対象** 就学前の主に知的・発達障がいのある子ども

**定員** 通所30名



**みかほ整肢園** (医療型児童発達支援センター)

ひまわり整肢園同様に、親子で通園し、総合的な療育と、各種相談支援を行っています。(令和2年4月1日より指定管理者による管理を行っています)

**所在地** 札幌市東区北17条東5丁目2-1  
(地下鉄東豊線 東区役所前駅から徒歩約12分)

**電話** 011-731-5674

**対象** 就学前の主に肢体不自由のある子ども

**定員** 通所40名



相互連携により、市内関係機関の支援体制の向上をめざします

必要に応じて、関係機関と協力し支援を行います

医療・保健・福祉・教育等関係機関

### ■ 愛称「ちくたく」について

「心・知をはぐくむ(知育)」「体をはぐくむ(体育)」を愛らしく表現した意味と、時計の針が動くようなイメージで、ゆっくり成長してほしいという意味も込められている。

## ◎視察目的

松阪市では、子ども発達総合支援センター「そだちの丘」において、心身の発達に遅れや心配のある子どもを対象に、保健、福祉、教育の各分野及び医療やその他関係機関との連携のもと、基本的な動作の支援、療育、訓練、集団生活への適応支援などを行い、子どもとその家族が抱える困り事に寄り添った支援を担っている。

子どもの人口が減少する中、障がいのある子どもは増加している。軽度の知的障害児や知的に遅れのない発達障害児の増加など、多様化してきている。一方、相談窓口や支援機関に繋がらず、福祉サービスの提供が必要な人に届いていないことが課題となっている。困りごとに関してどこに相談したら良いのか分からないという声も聞こえる。そこで、スムーズに窓口につなげる仕組みづくりや、複雑化した支援ニーズに対応していくため、母子保健、教育機関、子ども・子育て支援の関係機関、虐待予防の視点からも、地域の状況に応じた支援体制整備を進めることが必要である。札幌市子ども発達総合支援センターちくたくでの支援体制や現状、今後の課題を学び、松阪市での、保健、福祉、教育の各分野及び医療の支援体制強化を、今回の視察目的とする。

## ■ 札幌市子ども発達総合支援センター「ちくたく」庁舎の歴史

昭和9年 市立札幌病院静療院開設(成人の精神科病院開設)

昭和48年 小児特殊小児病棟、児童外来開設

昭和57年 第一種自閉症施設のぞみ学園開設

平成24年 札幌市児童心療センター開設(病院再編<児童精神科外来・病棟のみ運営>)

平成27年 札幌市子ども発達支援総合センター開設(複合施設化<公立の医療・福祉の関係機関を統合>)

## 支援の対象となる子ども

- ◆ 座れない、はいはいをしない、歩けない、歩き方がおかしい、転びやすい
- ◆ 筋力が弱い、筋力が強い、手先の細かい作業が不得意
- ◆ 耳の聞こえが心配、あやしても笑わない、目線が合いにくい、言葉の遅れがある
- ◆ こだわりがある、かんしゃくが強い、落ち着きがない、集団行動がとれない
- ◆ 友達とうまく関われない、学校に行けない、不安や緊張が強い、気持ちが落ち着かない
- ◆ 学習面でのバランスが悪い

身体機能面・運動発達面・精神発達面・環境適応面など、多くの課題が絡み合っている子どもも多い  
必要に応じて医師の指示のもと、心理審査、心理療法、精神科デイケア、ペアトレ、訪問看護など行う。

## 8.ちくたくの構成施設・機能

### ① 子ども心身医療センターについて

子ども発達支援総合センター内にある医療機関

小児科・児童精神科・整形外科・耳鼻咽喉科・眼科

## ② 児童心理治療センターについて

「こころぼ」は、児童相談所の措置によって入所が決まる「児童福祉施設」

- 1, 児童養護施設(保護者側の事情)
- 2, 児童自立支援施設(非行、触法的な問題)
- 3, 児童心理治療施設(心理治療を必要とする子ども)

北海道で2カ所目の児童心理治療施設。

児童精神科等の医師に常時連絡がつき、心理療法対応職員  
の配置が厚い。医療や教育と連動して施設での生活を通じて、  
子どもの主体性を取り戻す「総合環境支援」を行う。  
教育は隣接する、のぞみ分校にて受ける。



## 児童心理治療施設の入所児童の特徴

- ◆ 児童虐待児が7割以上
- ◆ ASD 的な困難を抱える児童が3割
- ◆ 児童精神科を受診している児童が4割
- ◆ 薬物治療中の児童が3割

## ③ 自閉症児支援センター「さぼこ」について

児童福祉法による「障害児入所支援」と障がい者総合支援法による「ショートステイ」を行う施設  
自閉症を主とする障害児を対象障害とする。

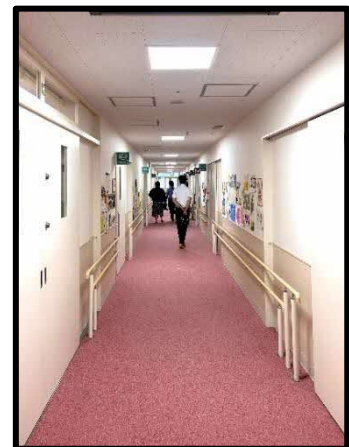
一時保護委託施設

緊急保護(家出・虐待など)、アセスメント保護(十分な行動観察、生活指導等行う必要がある)など  
利用している児童全員が障害程度区分3。重度支援、強度加算対象児が2名。重症心身障害児が1名。  
常に満床の状態。

措置入所と契約入所があり、保護者による虐待や養育拒否の場合等は措置、  
それ以外の場合には契約なる。措置の場合家族負担無し。契約の場合、  
保護者負担となる。

## ④ 地域支援室

ちくたくの総合相談(新患受付、発達・福祉相談など)  
施設医療館の内部連携、関係機関との連絡・連携  
内外向けの研修会の開催



## 9. 所感

発達障害は見えにくいという特性がある。子ども本人の性格や、親の躰、本人の怠けなどと捉えられ日常生活や、社会生活で生きづらさを感じ様々な困難な状況に陥ることがある。ましてや乳幼児期となれば、判断がしづらい。子どもの脳は、6歳までに急激に発達し、6歳までに適切な療育を受けることができれば、発達障害の子どもの生きづらさは、かなりの部分が解消すると言われている。保護者自身が子どもの発達に不安を感じ、育児不安を抱えている段階で、子どもや家族に対し丁寧に相談対応することが重要ではないだろうか。しかし、健診等で発達障害だと言われ専門機関に申し込んでも直ぐには受診できない現状がある。発達障害と診断される子どもが増えるにしたがって、適切な支援を受けられる施設が足りなくなり、重ねて作業療法士、理学療法士、言語聴覚士、心理士、ソーシャルワーカー、保育士、看護師、医師等の専門職員も不足しており、保護者の不安は募るばかりである。

今回の子ども発達支援総合センターちくたくの視察で、自閉症児支援センター「さぼこ」の施設内を見学させてもらった。本来であれば、自閉症児やその家族を支援するためショートステイができる施設だが、近年は虐待による一時保護施設として利用されることが増加しているとのことだった。また学校でのいじめなどで入所する子どもも増加し、施設の部屋は常に満床状態であるそうだ。虐待においては、ネグレクトや、暴力、暴言、また親が発達障害であることもあり、かなり複雑化している。いじめにおいては、発達障害のある子ども自身が自分の特性に気づいていないことや、自分や相手の気持ちをうまく表現できないことで、保護者や先生からいつも叱られ注意され、さらにできないことを友達から笑われたりして自信を無くしてしまうなどがきっかけで不登校や引きこもりに繋がることもあるという。

複雑な要素が絡み合うため、各関係機関との情報共有は不可欠である。そんなとき役立つのが「サポートファイルさっぽろ」である。入園、入学、進学、就労など、子どもに関わる人が代わる時や、受診や福祉サービスなどを新たに受ける時など、それぞれのライフステージに応じた支援が望めるフェイスシートのようなファイルである。子ども発達総合支援センターは18歳までの支援施設であるが、成人しても障害とは付き合っていかなければならない。そのときにも大いに役立つと思われる。



今後も増加すると思われる障害児。発達障害といっても知的能力障害、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症(ADHD)、学習障害、チック症、吃音など様々な障害があり、その傾向があるグレーゾーンと呼ばれる層もある。また増加している虐待も複雑化している。本格的に始動した子ども家庭庁では、現在二つに分かれている、妊産婦や乳幼児の保護者を支援する「子育て世代包括支援センター」と、虐待や貧困など問題を抱える子どもと保護者を支援する「子ども家庭総合支援拠点」を一本化し、「子ども家庭センター」自治体に設置することを努力義務とした。関係機関の専門職や学校、地域と松阪市が連携を強化し、更には身近な場所で子育て等様々な悩みに気軽に相談できる体制や、子育て世帯への支援を行う団体等との連携を強化に努め、複雑、多様化する家庭環境と発達障害などに対応できる支援体制の強化を図っていくことを望む。

文責：赤塚 かおり